第37回 街道

日本橋 品川宿 川崎宿 鳴海宿 宮宿 桑名宿 四日市宿

東海道五十三次の内

桑名宿～四日市宿まで歩く

ＹＵＭＥ追い人

今日は2018年６月29日㈮今回の参加者は１号車31名、２号車（南信と山梨方面の方）32名の計63名で、今回も二泊三日の「歩け歩け」になる。

今回バスが着く所は、前回ゴールした所とは違い、江戸時代に宮宿から海を渡り、七里離れた「桑名宿」の東の入り口「七里の渡し跡」近くの駐車場である。バスを降りて「七里の渡し跡」の公園まで歩く。

準備運動と今日の歩くルートの説明、注意事項を聞き、今日のゴールである朝日町歴史博物館までの名所旧跡を説明して戴く。

６月29日の「旅人企画」のウォークリーダー（随行案内者）は、１号車大塚さん（女性）、２号車三田さん（男性）、お二人は今朝大阪から列車で桑名に来たという。トラビスジャパン添乗員は１号車橘田さん、２号車石原さんである。

伊勢湾台風以後作られた防波堤

「七里の渡し跡」の広場は、現在は外側に防波堤があり、外海は良く見えない。1959年（昭和34年）の伊勢湾台風以後作られた高潮対策のための防波堤があるためだ。内海の、その内側の広場に大きな木製の伊勢神宮の「一ノ鳥居」がある。そのすぐ横に江戸や桑名の人達の寄進によって立てられた「常夜燈」があり、江戸時代の船着き場として栄えた。もとは別な所にあったらしい。

「七里のわたし」の石碑と一ノ鳥居、常夜燈

桑名宿の東の入り口には「川口番所」「船会所」「高札場」などがあったという。

長良川、揖斐川の河口部分と伊勢湾に面し伊勢神宮が近くにあり、海運業が昔から発達し、江戸へ年貢米を送った港でもある。

ここは商人の町でもある。年貢米が動くと商人が住む。琵琶湖が近い事もあって、近江商人、伊勢商人たちが活躍する場となる。

桑名城址は、この街道の京都に向かって左側の揖斐川沿いにある。

ＮＨＫで昨年放映された「どうする家康」で長い槍を持ち、冑の上に鹿の大きな角が２本立っている徳川四天王「本多忠勝」が作った城がここにある。家康が幼い時から徳川家に仕え、家康の懐刀として西日本にいる外様大名を見張るために、家康がここに城を作らせたという。

春日神社の銅鋳物製鳥居

大きな銅製の鳥居がここにある。春日神社の鳥居で、この地は銅製品の産地で、鳥居も銅の鋳物で造られており、鋳物師（いもじ）の街になっている。街中に鋳物製品が展示してある店があった。（中略）

桑名宿 大塚本陣跡に建つ割烹「船津屋」

ウォークリーダー（随行案内人）の説明を聞く。

『桑名宿は東海道五十三次の42番目の宿場町で、街並み南北約26町（約2,610m）家数2,544軒（内本陣２軒、脇本陣４軒、旅籠120軒）人口は女性4,458人、男性4,390人で合計8,848人でした。旅籠が120軒ある宿場町は東海道五十三次では多い方です。

これから宿場町の中を通りますが、この宿場町に２軒ある本陣の内１軒に大塚本陣跡があります。「大塚本陣跡」に今は「船津屋」と言う割烹が建てられています。又脇本陣は４軒ありましたが、その１つの「駿河屋」は現在割烹旅館「山月」の一部になっています』

「歴史を語る公園」に着く。その公園に説明板があり読む。

「桑名宿は東海道五十三次の内42番目の宿駅であり、桑名藩の城下町でありました。木曽三川の河川交通、伊勢湾の海上交通を担う湊町でもあった。その上桑名宿は熱田宿に次いで東海道第二位の宿数を誇り、一ノ鳥居を擁する伊勢路の玄関口としてにぎわいを見せていた。この様な史実に着目し、江戸の日本橋から京都三条大橋に至る東海道五十三次をモチーフにして造られたのがこの公園である。」

歴止を語る公園にある
ミニチュアの江戸日本橋

ミニチュアの江戸日本橋から始まり、沼津宿の富士山、京都までの主なる風景が作ってあり、最後は京都（京師）の三条大橋で終わっている。この公園の横は海に続いている堀があり、その堀にボートがたくさん留めてある。

「常夜燈」と「道標」がある所でウォークリーダーの説明を聞く。

『一目連神社の一目連と言う珍しい名前の神社は「金属工業」の神様を祀ってあり、桑名は鋳物の町で、先ほど通った春日神社の大鳥居は鋳物でできております。こ

の町を通るとお寺の梵鐘やたたき鐘、消防関係の半鐘、仏壇のたたき鉦等が店舗に並んでいます。又、この先に「東芝」の鋳物関係の工場があります』

一目連神社

町屋橋を渡り、江戸日本橋から97番目の縄生一里塚跡（三重県三重郡朝日町縄生）に着く。江戸時代に桑名宿と四日市宿の間が三里八丁と長く、途中に「立場（お休み所）」が各地にあった。桑名宿側に矢田、安永があり、四日市宿側に小向、松寺、富田、羽津、三ツ谷と5箇所あった。

江戸日本橋から97番目の
縄生一里塚跡の石碑

京に向かって歩く。樹齢300年の榎が名所になっている所を通り、朝日町歴史博物館で本日のゴールとなる。

整理運動をしてバスに乗り、四日市市にある寿司割烹の福禄壽総本店へ行き夕食をとる。

夕食後「ホテルルートイン南四日市」に行く。9階の部屋からは「四日市コンビナート地帯」が見え、夜でも広い工業地域のライトがそれぞれ点いていて、イルミネーションが光っている様な美しい夜景である。シャワーを浴び、この夜景を見ながら就寝につく。

6時30分よりルートイン南四日市の「花云亭」の朝食が始まる。

ホテルの駐車場に大型バスが2台待っている。8時30分までに集合し、人数確認し出発する。昨日ゴールした「朝日町歴史博物館」に着き、今回も準備運動、歩く時の注意事項、本日歩く名所旧跡の案内等を聞いて出発する。

今日のウォークリーダー（随行案内者）は昨日と同じ1号車大塚さん（女性）、2号車三田さん（男性）、トラビスジャパン添乗員は1号車竹前さん（女性）（橘田さんは都合で昨夜山梨へ帰る）2号車石原さんである。

ＪＲ朝日駅入り口を横に見て南（京都）に向かって歩く。

松寺立場に着き、そこにある木製看板を読む。

「東海道松寺の「立場」には昔は大きな榎の木があり、街道を往来する旅人や人足などが箱や荷物を降ろして杖を立て一休みした所で、公の休憩所の所で茶室などがあり、立場茶屋と呼んでいた。当村桑名宿と四日市宿の間には5ヵ所の立場が、北は小向の立場、南は富田の立場があった」と大矢知歴史研究会で立てた木製看板である。（中略）

どこの誰が言ったのかわからないが「その手は桑名の焼蛤」の文言があるが、その焼蛤について説明板があったので見る。

「富田の焼蛤」説明板

『「富田」は東海道五十三次の桑名宿と四日市宿の中間にある「間の宿」として栄え、西国大名の参勤交代で賑わっていました。焼蛤は小向と富田の名物でしたが、江戸時代の道中記のどれにも焼蛤は桑名の名物として取り上げられていません。富田が当時桑名の藩領だった事から、後になって「桑名名物焼蛤」と出てきます』

富田地区市民センターで製作され、道路わきに掲示された説明板である。

多賀大社の常夜燈

富田一里塚の前でウォークリーダーの説明を聞く。江戸日本橋から98番目の一里塚で、ここは三重県四日市市富田三丁目で、三重県指定史跡になっているという。

多賀大社常夜燈の前を通る。富田立場の案内板を見てから、羽津立場近くのコンビニ駐車場に入る。ここで昼食タイムである。仕出し割烹の「しげよし」の弁当をバスの中でいただく。バスは我々の昼食のために、朝下車した所からこの駐車場に来て待っていてくれたのだ。この旅の朝食、昼の弁当、夜の食事は皆美味しい料理で楽しみである。

志氐神社入口で説明を聞く

昼食後「かわらずの松」の前を通り、「志氐神社」へ行きウォークリーダーの話を聞く。

『志氐神社は延喜式神名帳に名がある古社で垂仁天皇の頃に創祀された神社で、「しで」とは御幣の事で、大海人皇子の天照大神遥拝伝説に因んで名付けられました。この神社の奥には四日市市内では唯一の前方後円墳があります』

又、南へ向かう。三滝川を過ぎるとすぐに「なが餅」という餅を江戸時代から作っている歴史ある餅屋がある。「笹井屋」という店で、この店に入りみやげを買う。細長く平べったくて中に餡が入っていて牛の舌の形に似た餅で、1550年から作っているという。

東海道五十三次の大きな川の前後に、名物の餅や菓子を売っている店（茶店）がたくさんあり、「名物に旨いものなし」が普通だが、東海道は「名物に旨い物あり」で皆うまい。

四日市宿についてウォークリーダー（随行案内者）の説明を聞く。

「なが餅」を売っている笹井屋

『四日市宿は、江戸を含めて四十四番目の宿場で（品川から数えると43番目）幕府直轄の天領であり、代官所が置かれていました。

町並み南北6町20間（約697m）です。家数1,811軒（内、本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠98軒）人口は女性が3,592人、男性が3,522人、合計7,114人です。この地はお寺が多く、徳川家にゆかりある桑名藩主の奥方の菩提寺「浄泉防」は有名で、山

門や瓦に「三つ葉葵」の家紋が付いています。富田の一里塚、三ツ谷、日永　姪と４つの一里塚があります。元々室町時代の末から４日、14日、24日と四の付く日に「市」が開かれていたので「四日市」の地名になった様です』

桑名藩主の奥方の菩薩寺の浄泉防

陣屋跡を通りすぎ、「黒川本陣跡」を経て、諏訪神社に着き、参拝する。

アーケード街を通り、「丹羽文雄生誕の地」という立派な石碑が立っている所でウォークリーダー（随行案内人）の話を聞き、日永興正寺へ向かう。（中略）

日永神社でトイレタイムになる。ここですぐ近くの「日永うちわ」のお店に行く事をウォークリーダーに提案される。

『江戸時代、東海道「日永の宿」では「日永うちわ」「氷餅」「日永足袋」の３つのみやげ物屋が軒を連ねて賑わい、中でも「日永うちわ」は農家の人々が農閑期に作り始めたもので、お伊勢参りのみやげの１つとして好評を得ていました。資料に残っているのは、今から230年程前には盛んに製造し、街道を上下する人々に売っていたと記録に残っていますが、それより60～70年前から売られていた様です。平成６年三重県伝統工芸品に指定されました。

小生も「日永うちわ」を２本買った。１本は東海道五十三次の四日市宿を描いた「廣重」の浮世絵柄があるものと、もう一つは、黒、薄い青、明るい青、白が縦縞に入っている布が片面に貼ってある落ち着いた柄の「うちわ」である。丸い細い竹から作る方法で、今では日永の「㈱稲藤」が作っているだけで、他には作っていないという。

２本共風情のある「うちわ」で大事に使いたいと思う。インテリアでも使える。

４代目社長は「伝統を守り抜く」「特注の物を作りたい」「海外にもっと輸出したい」と言っていた。丸竹使用の使いやすい伝統「うちわ」をもっと広める事は出来ないものか。

「日永神社は伊勢神宮で祀られている天照大神を祀る。古くは「南市場神明社」、「南神明社」と呼ばれていた。日永神社と単称されたのは明治四十年からである。創祀沿革の記録や文章が残されておらず、いつの年代に創祀されたのか不明である。江戸時代には神戸藩主本田家からの崇敬も篤く、又東海道に面して多くの人々が参拝された。明治40年には日吉神社、岡山白髭神社、山之神社、さらに天正10年（1582年）に創祀されたと伝えられる追分神明社を合祀し、明治44年には池鯉鮒社、稲荷社を合祀して現在に至っている。祭礼は十月の体育の日である。（中略）

日 永 神 社

正面の拝殿右側に立つ道標は、もと追分の神宮遥拝鳥居の場所にあったもので、明暦二年（1656年）に僧侶によって立てられた東海道最古の道標である」と、日永神社の歴史が書いてある案内板が入り口に立っている。

日永の追分道標

日永の追分に来てウォークリーダーの話を聞く。

『日永の追分は、東海道と伊勢参宮道の分岐点」、東海道は通るが伊勢神宮に参拝しない人の為に、高さ７ｍ余りの神宮遥拝鳥居を安永３年（1774年）に立てました。以来、伊勢神宮敷年遷宮毎に神宮の古材を使って建て替えられました。ここの鳥居は2016年建て替えで十代目となります。鳥居は以前と同じ場所、同じ寸法で作られています。道路の中央に湧水があり、鈴鹿山脈で湧く水をここまで引いて、四日市のシンボルになっています』

日永の追分、東海道と伊勢参宮道の分岐点

日永一里塚に来る。日本橋より100里の地、三重県四日市市日永五丁目である。

現在一里塚は無いがもとは５ｍ四方で高さが2.5ｍの塚が東海道の両側に築かれており、西側の塚には榎が残っていたが、明治２年（1869年）に伐採され、塚も姿を消したという。

近隣の一里塚は石碑が立ててあるだけで、一里塚としては残っていない。江戸時代から明治の時代になって、一里塚は必要が無くなり、つぶして畑とか道路になったものが多い。

ここまで来たら「歩け歩け」に履いていた靴の横部分が痛んできた。Ｎのマークの付いた愛用の靴であるが、約400㎞歩くとそろそろ買い替えの時期なのかと思う。良く歩いた良く足を守ってくれた　感謝感謝である。

本日の夕食は　鈴鹿山麓とろろ飯自然薯料理「茶茶」で食べる。自然薯を使ったおかず、麦飯と自然薯中心の料理で大変美味しくいただいた。飛騨高山に「じねんじょ村」と言う姉妹店があるという。

食事後、昨日と同じ「ホテルルートイン南四日市」に帰る。今夜もコンビナートの夜景がきれいだ。

今回の二泊三日の「歩け歩け」は明日の午前中で終わり、午後は長野へ帰るバスの中だ。

帰る為の準備をしてからシャワーを浴びベットに入る。明日は３日目でどんな所を歩くのか楽しみだ。

次回（四日市宿～石薬師宿）に続く